

ふるさと再見 61

エソビタキ

この鳥は春と秋だけ見られます。夏は日本より北のカムチャツカ、千島、サハリンなどで繁殖し、冬は日本より南の台湾、フィリピン、東南アジアで過ごし、南アジアで過ごし、このため、日本では移動の途中の春と秋に立ち寄るだけです。秋のほ

うが滞在期間が長く、見る機会が多いのです。エソビタキの越冬は北海道のことで、そこから来る「ヒタキ」のなかまの鳥という意味ですが、実際はもつと北の国からやって来ていたのです。

スズメより小さく、雌雄同色です。お腹に縦のしま模様があるのが特徴です。平地から山地の明るい林や林の切れ目などで過しています。単独か十数羽位の小さな群れで行動しています。

木の下枝などに止まり、飛んでいるチョウやガやア



▲秋に見られるエソビタキ

ブやウンカなどを空中で捕えて食べます。このためかよく見えるように比較的大きな目をしています。

9月から10月にかけて、尖石公園や竜神池でよく見かけます。木の实もよく食べます。この鳥が見たい時は、よく実が付いたミズキの木を見つけて、その下で待つことにしています。

渡りの途中でさえずることはありませんが、地鳴きはツイ、ツイ、ツイと聞こえてきます。秋の深まりを教えてください。秋の深まりを教えてください。秋の深まりを教えてください。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 62

ハギマシコ

この鳥の雄は、胸、腹、腰、翼の一部が美しい紫色をしています。日本の鳥でこの色を身にまとい、いる唯一の鳥です。

ハギマシコ（萩雛子）のハギは萩の花の色からで、マシコは冬に渡ってくるアトリ科の赤系統の小鳥をサルベの赤い顔に見立てて付けられました。

体の大きさは、スズメより、少し大きいくらいです。シベリア東部からカムチャツカ半島、北アメリカ大陸の北西部で繁殖し、そのうちの一部が暖かい地方へ南下して、冬を越します。日本へは、冬鳥として渡ってきます。東日本や北日本に多く見られます。諏訪地方では、1000m以上の山地の草地、河原、崖や岩場の周辺、荒地などを好みますが、時には平地の水田や農耕地に現れることもあります。群れで生



▲萩の花の色のハギマシコ

活していて、十数羽から百羽を越える群れになって生活しています。

食べ物は植物質が主で、イネ科、タア科、シソ科の種子をよく食べます。ヒマワリの種も好きです。

冬の地鳴きは「ジュツ、ジュツ」とか「ピーピー」とか聞こえます。数は少なく、見る機会の少ない鳥ですが、一冬に一度はあの素敵な秋色に出会いたいと心待ちにしています。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 63

カワアイサ

毎年冬になると、諏訪湖のワカサギを食べてしまうと問題になるのがこの鳥です。

食べ物は魚が主で、水中4m位まで潜って捕ります。くちばしの先は鉤状で、獲物がかみやすいようになっています。

秋に日本に来て冬を越します。名前のアイサは、秋去り→アキサからきています。秋が去り冬が来るという意味です。

世界的にはユーラシア大陸、北アメリカ大陸の中緯度で生活していて、冬は各大陸の南の暖かい地方に移動します。冬期、諏訪湖に多く生息していますが、茅野市の池や川でも見られることがあります。同じ仲間ウミアイサが海を好むのに対して、カワアイサは、内陸の湖や池や大きな川など淡水を好みます。



▲左が雄、右が雌。カワアイサ

今から20数年前は、諏訪湖にわずかしきいませんでしたが、今では2千羽近くに増えていきます。ワカサギの減少と関係があるということ、舟や大きな音などで追い払っていますが、居続けています。

全面結氷すると、上川や他の場所に移りますが、氷が溶けると、再び舞い戻ってきます。温暖化で氷が張らなくなったことと数が増えたことは関係しているようです。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 64

コサギ

サギの仲間で、白い羽の鳥を総称して白鷺と呼んでいます。その中で一番小さい種類がコサギです。足の指が黄色いのが特徴です。夏になると後頭部に2本の長い冠羽や、胸と背にレーズ状の飾り羽が生えてきます。

アジア・アフリカ・オーストラリアの各大陸の、温帯から熱帯にかけて広く分布しています。日本では本州から九州まで、一年中生息し、繁殖しています。湖や池、河川、水田などの水辺で暮らしています。食べ物は、魚が主で、カエル、ザリガニなどです。

餌の取り方は、歩き回ったり、獲物が近づくと待っていたり、浅瀬では片足で泥をかき回して魚が出て



▲片足で休んでいるコサギ

くるところを捕えたりします。繁殖は4〜9月と長いのですが、一定の狭い範囲の林の中に、ゴイサギなどと一緒に集団で固まって巣をつくります。営巣地は、声がうるさかったり、魚の死体や糞などで巣の下は臭臭がしたりするので、人に追いやられることが多く、数年おきに移動します。諏訪地方では今までに、上社の森や、下社裏の林、岡谷間下の山際の林などで集団営巣しました。現在は上川水辺近くの林で繁殖しています。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 65

アオシギ

晩秋から初冬にかけて、尖石公園内の沢にやって来て、冬を越し、春に去っていく二種のシギがいます。それはヤマシギとアオシギです。二種とも山地の溪流、湿地などに生息するシギです。

アオシギはハト位の大きさで、真っ直ぐな長いくちばしを持っていきます。体のところどころにある白い部分、うつつらと青みがかった灰色をしているので、アオシギと言いますが、体全体は黒褐色や褐色で、土や落葉に溶け込んで、目立たない地味な鳥です。ユーラシア大陸の中緯度の東部（シベリア・中国・ヒマラヤ・サハリン等）で繁殖し、冬はやや南方で過します。

日本へは全土に冬渡ってきます。分布は中部以北に多いようですが、数は少なくなかなか人目に触れる機会が少ない鳥です。冬期群れることはなく、一羽一羽別々に暮らしています。



▲長くちばしのアオシギ

食べ物は動物質で、ミミズや水中の泥の中に住む水生昆虫、その幼虫・ムカデなどです。泥の中に長くちばしをさし込んで捕えます。その間によく体を上下にゆする動作をします。ヤマシギが主に夜活動するのに対して、アオシギは昼間行動します。数が少ないので、環境を含めて保護が必要な鳥です。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 66

ダイサギ

白鷺と呼ばれている鳥の中で、一番大きいので、大鷺と名が付けられました。世界中の熱帯・温帯で繁殖していて各大陸に広く分布しています。

ダイサギに2つの亜種があります。亜種とは、種としては同じグループだが、形態や生態に違いが認められる場合、さらに細かく分けた時の名称です。ひとつは、諏訪地方へ冬に来て過す亜種ダイサギ（オオダイサギとも言う）です。もう一つは、チュウダイサギで、夏に日本に渡って来て繁殖します。

この亜種は、諏訪地方へは、春と秋の移動の途中に立ち寄るだけです。春先出会うチュウダイサギは、胸や背にレーズのような美しい長い飾り羽が見られます。これを贅毛と言います。



▲ダイサギ

食べ物は魚が主ですが、カエル・ザリガニ、時にはネズミなども食べます。水辺をゆっくり歩いて長い首をサッと伸ばして、くちばしで挟んだり突き刺したりして獲物を捕らえます。生活場所は、川や湖や池などですが、群れることはなく、単独で暮らしています。青い空をゆつたりと飛ぶ姿は、優雅で美しい光景です。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 67

ツバメ

鳥のほとんどは、人や天敵にみつからないように、茂みや建物のすき間などに巣を作りますが、ツバメは逆に軒先や壁など人の目につく場所に巣をかけます。人は米など穀物の

害になる虫を食べるツバメを、昔から大事にしてきました。その結果、人間を信じて、わざわざ人目につく所に巣を設けるようになりました。人にへびやカラスなど天敵から守ってもらったためです。

日本へは、3月下旬から4月にかけて、東南アジア方面からやってきます。日本にいる夏の間、1回か2回繁殖します。多くは、1軒に1つの巣をかけます。食物は、飛んでいる虫でツバメは飛びながら口で捕えて食べます。水面すれすれに飛ん



▲巣材の泥を集めるツバメ

で、水も空中で飲みますし、水浴びも飛びながら行います。

休む時は電線などに止まります。地上には、巣の材料の泥や枯れ草を取る以外めつたに降りません。このため、足が短く歩くのは苦手です。スマートな体つきや切れこんだ尾羽など空中の生活に適しています。

家の造りの変化により巣を作る場所がないため、全国的にツバメの減少が心配されています。人との良い関係がずっと続くよう見守っていききたいものです。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 68

アマサギ

アマサギも白鷺と呼ばれる仲間的一种です。春から夏の繁殖期は、写真のように胸と首から上と背中の一部分の羽は亜麻色になります。そうでない冬羽は、全身白色になります。

名前の由来は、亜麻色の鷺からと始色の鷺(あめさぎ)からきているなどの説があります。

アマサギは、世界中の熱帯温帯に広く分布しています。日本へは、春から夏にやってきて繁殖します。70年くらい前から増えてきて、今も北日本に広げつつあるようです。

冬はフィリッピンなど南方に渡りますが、九州以南では一部冬も留まるものもいるようです。

諏訪地方では、移動の途中の春と秋に見られるだけで、まだ繁殖



▲亜麻色が美しいアマサギ

は確認されていません。

農耕地、草原、湖沼などに生息しています。食べ物が魚ではなく、イナゴ・バッタなどの昆虫や、カエルなど食べるため、他のサギに比べ、乾いた場所を好みます。

耕運機について回り、とび出したり土の中から出てくる昆虫を食べます。

海外では、水牛やカバの上に乗って寄生虫を食べることが知られています。5月中はアマサギに出会えるチャンスです。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 69

マミジロ

マミジロの雄は、真っ黒い体に、真っ白な太い眉毛が目立ちます。マミジロ(眉白)の名はこのまゆげの模様からきています。

雌は全体茶褐色ですが胸から腹にかけての鱗状の羽が美しい。ツグミのなかに、体の大きさはムクドリ位です。

ユーラシア大陸の東部の温帯・亜寒帯で繁殖し、冬は中国南部やインドネシア半島で過ごします。日本へは夏鳥として渡来し、中部地方以北の山地で繁殖しますが、個体数は多くありません。

諏訪地方では、主に亜高山の針葉樹林で繁殖しますが、移動の途中では低い山地でも見かけます。私は永明寺山や小泉山の入口の林で見たことがあります。ほとんど薄暗い林の中で生活し、姿を現すことも少ないので、目



▲白い眉斑が目立つマミジロの雄

にすることが少ない鳥です。

餌は、ミミズや昆虫や幼虫などで、地上を歩いて足で落ち葉をどけて探します。さえずりは、ゆつくりと鋭く一声で鳴きます。私はこの声を「チヨポイチー」と覚えるといいと教わりました。主に朝夕にさえずり、日中はほとんど鳴きません。

巣は、林の中の低木の枝に枯れた茎や根を泥で固めておわん状の巣をつくるようです。

行き会うと眉毛の白が引き立ち印象に残る鳥です。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 70

メジロ

目の周りに白い輪があるため、目白と言います。スズメよりずっと小さく、体の色は上部が鮮やかな黄緑、下部は白色です。鶯餅に代表されるうぐいす色は、このメジロの色のことです。(本当のうぐいす色は少し緑がかった茶色です。)

日本では本州以南では一年中生息しています。北海道では夏鳥です。平地から山地の林にいますが特に常緑の広葉樹に多いようです。このため南に行くにつれて多く生息しています。

諏訪地方では、一年中見られますが、冬になると数が少なくなるので、暖かい地方へ移動するものもいるようです。

食べ物は昆虫やクモ、柿などを食べるほかに、梅・桜など花の蜜を吸います。蜜が吸いやすいように、くちばしがやや下向きになっ



▲黄緑が目立つメジロ

ていて先が細く尖っています。

よく梅の花に来るメジロを、この頃鳴き出したウグイスと混同されたようです。さえずりは、体の割には大きく「チュチュイチョー」などと良く通る声で繰り返します。この声を「長兵衛忠兵衛長忠兵衛」と覚える」とよいと言われてきました。桜の花の中で、よくこの声

が聞こえてきます。繁殖期は5〜8月。巣は二股の枝先に、コケや枯れ葉などをクモの糸で絡めてハンモック状に作ります。(野沢 進之輔)

ふるさと再見 71

コサメビタキ

種名の中のサメは、羽の色が鮫の肌に見えることに由来します。コサメのコは、サメビタキより小さいという意味です。

体の大きさはスズメよりやや小さく、雌雄同色です。目は比較的大きく目の周りは白く太い輪があります。下嘴だけ橙色をしています。

夏鳥として日本各地に、ヒマラヤ、シベリア、中国、朝鮮などから渡ってきます。冬はインドや中国、ボルネオなどに移動して過ごします。

諏訪地方では、標高1000m以下の雑木林やカラマツ林など、あまり密集していない林で生活し、そこで繁殖します。食べ物の多くは、ガやチョウやアブやカなど飛んでいる昆虫です。木の上の



▲大きな目のコサメビタキ

方の枝に止まっていて、虫を見つけると飛び立って捕えます。多くは元いた枝に戻ります。このため林の中の空地が大切になります。大きな目は、飛んでいる虫の見つけやすさと関係ありそうです。

さえずりは細くて複雑なため表記がむずかしい鳥です。ぶつぶつ早口で何か言っているように聞こえます。巣は水平な枝の上にお椀状に作り表面をコケで被せて天敵にわからないようにしています。

地味な色をしています。目が大きくとても愛くるしい鳥です。(野沢 進之輔)

ふるさと再見 72

アカショウビン

全身赤っぽくて、特に嘴は鮮やかな赤色をした鳥です。これほど強烈な赤色をしている鳥は他にいません。雌雄同色です。

名前のアカは体の色からショウビンはカワセミの別称で赤いカワセミという意味です。

夏の渡り鳥で5月に日本各地へタイやボルネオ島など東南アジア方面から飛来します。

諏訪地方でも各地に繁殖記録があります。一昨年移動の途中のこの鳥に尖石の自然の森で出会ったことがあります。よく茂った広葉樹を好む森林性の鳥です。森林の中の溪流の近くや湖沼の周辺にいます。食べ物は魚、サワガニ、カエル、セミバッタなどの昆虫、カタツムリ、トカゲなど多様です。私は1mもあるへびをくわえ



▲全身赤色のアカショウビン

ているのを見たことがあります。

「キヨロロ」と尻下がりにさえずり、繰り返します。主に早朝や夕方に鳴きますが曇った日や雨の日は日中でも鳴くため「水恋鳥」の別名もあります。

巣は樹洞、崖の横穴、キツツキの古巣などにつくります。私は大きなスズメバチの古巣の中に巣をつつたのを2度見ました。

鳥の好きな人達の間ではベスト3に入るくらい人気の高い鳥です。(野沢 進之輔)

ふるさと再見 73

ホオジロ

「高規のこずゑにありて頬白のさえずる春となりけるかも（概はケヤキ）」これは島木赤彦のよく知られた歌です。ホオジロは春の気配が近づくと、この歌のように、よく目立つ高い木のでっぺんで鳴きます。雄はなわばりを守ったり、雌に求愛するためさえずります。美しく、よく通る声で、節まわしがはつきりしています。このため、聞きなれし（鳥の声をそれに似た人の言葉に置き換えること）では、「一筆啓上付り候とか「源平つつじ白つつじ」とか、最近では札幌ラーメン味噌ラーメンとか言われます。どれもそれなりに聞こえます。ホオジロはスズメよりやや大きく全国に一年中生息し、繁殖しています。雄の顔は白と黒のまだらになっています。



▲水浴びをするホオジロの雄

雌は全体に色が淡く、顔も褐色がかっていて、雄ほど白黒がはつきりしません。藪を好み、草原、集落周辺、農耕地、土手、林の縁河原、疎林など開けた場所にいます。草の種子が主な食べ物で地上でよく食べています。巣は藪の中の低木におおん状につくります。ひなには昆虫の幼虫を与えます。ホオジロは体の色はスズメに似ていますが、気をつけてみると意外と身近に見られる鳥です。
(野沢 進之輔)

ふるさと再見 74

イカルチドリ

この鳥は海辺に出ることは少なく、主に川の中流上流の砂利のある川原を好みます。外に湖沼、池、水田など内陸に住む鳥です。日本では全域で一年中ほぼ同じ場所です。中国南部で夏繁殖し、冬は中国南部やミャンマーに移動するものもいます。よく似た種類で夏に渡ってきて日本で繁殖するコチドリがありますが、コチドリより目の回りの黄色の輪が薄く、体は少し大きめです。雌雄とも同じ色をしています。名前の由来ははっきりしませんが、小鳥のイカルとは関係ないようです。食べ物水生昆虫の幼虫が多く、水際を歩いて、水面と泥の表面から集めています。



▲水際で虫を探すイカルチドリ

ます。甲虫などの昆虫の成虫や幼虫も食べるようです。捕食する時、立ち止まって体を上下に動かしたり、走ってきて急に止まって虫を驚かす姿が見られます。巣は砂地や礫地の窪みに小石を集めて作ります。ひなは身を守るため、生まれてすぐに歩けます。危険が迫ると親鳥が鳴き、ひなは砂の上にくすぐまっただまきません。さえずりは「ツイツイツイツイ」とよく通る声です。鳴きながら上空を飛びまわることもあります。
(野沢 進之輔)

ふるさと再見 75

モズ

モズはスズメよりやや大きく、尾が比較的長い鳥です。くちばしの先が曲つていてタカのように、顔つきも目を通る線が大きく勇ましく見えます。モズの世界の分布は狭く、日本を中心に中国北東部、朝鮮半島、サハリンなどです。日本では全国に一年中生息していますが、寒い地方や標高が高い地域のモズは、冬期暖かい地方へ移動します。住宅街などの平地から、農耕地、高原、河原、明るい林と広く住んでいる身近な鳥です。そこで主に昆虫、ミス、カエル、ネズミ、ヘビ、魚、小鳥などを食べています。モズは舌と表しますが、これは他の鳥や動物の鳴き声を真似することから、たくさんの舌で使



▲獲物を探すモズの雄

分けていると考えられたからです。モズは雄も雌も秋になると、高い木のでっぺんで「キーンキーンキーンキーン」とよく通る声でしきりに鳴きます。これを「モズの高鳴き」と言い、秋の季語になっています。モズは秋から春にかけて雄も雌も単独でなわばりを持つて生活するので、なわばりの宣言のため、さえずるわけです。モズは昆虫や小動物を木のとげや枝に刺します。これを「モズの速賢」と呼んでいます。
(野沢 進之輔)

ふるさと再見 76

コハクチョウ

冬季日本にやってくる白鳥は、オオハクチョウ約1万羽とコハクチョウ約6〜7千羽です。諏訪湖や上川に毎年やってくるのはコハクチョウです。

この鳥は夏、ユーラシア大陸やアメリカ大陸の北極圏で繁殖し、冬は南大陸南部に転々と渡ります。日本へは本州から九州にやってきて10月から4月の間過ごします。

家族の結びつきが強く、親と子の4〜7羽の単位で一結に行動します。幼鳥は全身が淡い灰色なのですぐにわかります。

食べ物には植物質で、水草や種子などです。水中に首を入れ逆立ちになって食物を探します。全身水中に潜ることはできません。

諏訪地方へは1974年以來ずっと飛来していますが、年によって数は



▲家族で行動するコハクチョウ

多くなります。北の方で雪が多いと、数が増えます。多く来た年は、茅野市内の水田にいたこともありま。10月には諏訪地方に来ていますが、ここ数年遅くなり12月になっています。諏訪地方から北へ帰っていくのは、2月から3月ですが、一気に北の国に飛ぶのではなく、2ヶ月くらいかけて日本各地を徐々に北上し、日本を離れます。最近、鳥インフルエンザの感染源として問題になっていますので、注意して接したいものです。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 77

タゲリ

タゲリは歌舞伎役者のように、白と黒のはっきりした顔立ちで、頭の後ろには黒くて長い羽があります。背と翼は金属のような光沢をもった緑色で、翼の一部はワインカラーがかかっています。似ている鳥はいないというほど、特徴のある鳥です。チドリ仲間、ムクドリより一回り大きい鳥です。

この鳥は日本では中部以南に秋渡って来て10〜4月の間過ごしています。世界的には、夏ユーラシア大陸の中緯度に広く分布し繁殖して、冬は大陸の南部に移動します。諏訪地方では数年一度くらい飛来します。山間地の湿った水田や畑草地、河原などで見かけますが、厳寒期に地面が凍り

つくと、暖かい地方に移動します。食べ物はミミズや昆虫の幼虫などで、地中から掘り起こして食べます。この時片脚で地面をたたくて、虫を追い出して捕えることもあります。また歩いたり走ったりして、急に立ち止まり獲物を襲ったりします。鳴き声は「ミュー」でネコのような声を出します。名前の由来は、近縁のケリが「ケリケリ」と鳴くことから、田に多く見られることからこう呼ばれています。初冬、出会うのを楽しみにしている鳥の一つです。

(野沢 進之輔)



▲光沢のある緑色をしたタゲリ

ふるさと再見 78

ヨシガモ

3月は、秋にやって来たカモ類が、繁殖のため北の国へ帰っていきます。ヨシガモもその中の一種です。

ヨシガモは、夏はシベリア東部やサハリンや北海道で繁殖し、冬は中国東・南部へ移動します。

世界的に見て限られた地域にしか分布していません。日本へは主に本州中部地方以南に飛来しますが、局地的です。諏訪地方でも数少ない水鳥です。

湖や池・河川・水田などで生活しますが、夜も水田などに出かけ採食します。ヨシガモの語源は「をしがも」で、「をし」とはオシドリを指し、オシドリのように美しいカモからきています。カモの中ではさらびやかでおしゃれに見えます。



▲おしゃれに見えるヨシガモ(雄)

まず、頭の形がナポレオンが被っていた帽子に似ていることが知られています。頭頂が赤紫色で、顔は緑色ですが、どちらも光沢がありません。背や胸や脇は灰白色で、細かい鱗の模様をしています。また、体の後ろには、翼の一部が変化して鱗のように曲った飾り羽を持っています。雌は全身が褐色で地味です。食べ物は、イネ科やタデ科の種子や水草や土手に生える雑草などです。こうした数少ない水鳥に会いたくて探し回るのも、冬の探鳥の楽しみみです。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 79

ゴジュウカラ

この鳥は、小鳥の中でも独特の体形をしています。流線形の体付き、短い尾、細長い嘴、長くて丈夫な足の指と爪。どれも幹や枝を動き回って、隠れている虫などを探すために都合よくできています。このため、鳥類の中では唯一垂直な幹を歩いて下りることができます。

ゴジュウカラの名は、シジュウカラと似ていますが、少し違うという意味で付けられたという説もあります。カラは小鳥という意味です。

世界的にはユーラシア大陸に広く分布していて、日本では一年中ほぼ同じ場所で生活しています。諏訪地方では標高1000m以上の山地に生息しています。厳しい冬でもほとんど里には下りていきません。



▲幹を歩き回るゴジュウカラ

食物は主に昆虫やクモですが、時には種子や果実も食べます。冬の餌台のヒマワリの実も大好きです。嘴をたたき付けるようにして、木の割れ目にいる虫を捕えます。種子などを幹の割れ目に詰め込み木片などでふたをして隠し、後で取り出して食べる習性があります。キツツキの古巣などの樹洞に巣をつくりまわります。入口が体より大きいと泥を運んできて体に合わせて、入口を狭めます。左官やさんみたく、「ファイファイ」とよく通る高い声でさえずります。普段は「ピヨッ、ピヨッ」と鳴いています。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 80

ビンズイ

ビンズイの名は、さえずりの鳴き方「ピン・ピン・ツイ」からきているようです。実際はヒバリに似て複雑に長くさえずります。ヒバリと同じように飛びながら鳴くこともありま

す。ビンズイは東アジアに広く分布しています。日本では夏、本州中部以北の山地で繁殖し、冬は中部以南の暖かい土地に移動して過ごします。

諏訪地方では、開けた明るい林や林の縁、スキー場や草原などで生活しています。霧ヶ峰では大きな岩の上で良く鳴いているので、出会えるチャンスです。ビンズイはセキレイ科で雌雄同色です。セキレイと同じく、よく尾を上下に振ります。スズメくらいの大きさで、腹部の黒褐色の縦



▲水場に来てきたビンズイ

じま模様が目立ちます。地上での生活が多いため、足は他の小鳥に比べ長く見えます。食べ物は動物質で、昆虫の幼虫や成虫、クモ、ムカデなどですが、冬は植物の種子なども食べるようです。5〜8月の間に2回繁殖します。巣は地上の草の根元や土手の窪みや崖などにおわん状に作ります。卵は3〜5個です。カッコウに寄生卵されることもあります。※托卵・他の種類の鳥の巣に卵を産み育ててもらう。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 81

ゴイサギ

この鳥は、選子で五位鷹と書きます。庭にいた鷹がおとなしく捕まっていたので、神妙であるとして、時の天皇が五位という官位を授けたという話からきています。ゴイサギはほぼ全国的に広く一年中生息しています。諏訪地方では4〜5月にかけて、国内の暖かい地方から来て夏繁殖し、秋再び移動します。写真は成鳥ですが、青味がかった翼と頭、ずんぐりした体型、頭の二本の細長い飾り羽が特徴です。

成鳥になるまでに4年かかります。それまでは、全身、白っぽい斑点がある茶色で、星五位と呼ばれています。繁殖は、諏訪中のゴイサギが、ある一ヶ所に集まってゴサギも交えて集団で巣をつくりまわります。これ



▲後ろ姿も美しいゴイサギ

をコロニーと呼んでいます。コロニーのある木の下は食べ残した魚や蛙の死体、糞ひなの死がいなどで、異様な臭いがします。また昼夜を問わず鳴き声がうるさいので、近くの住民には迷惑がられています。このため追い払われたりして、何年かおきにコロニーを変えてきましたが、現在は上川の河川敷の林で130単位で安定しています。夜行性で飛びながら「ゴアツ」と鳴きます。ゴイサギが安心して集団繁殖しているのは、水辺の生き物の豊かさの証です。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 82

オオジシギ

この鳥の雄は「ジエツジエツ」と鳴きながら空高く舞い上がり「スピーヤクスピーヤク」と鳴いてから「ザザ」と風を切る音を出しながら急降下します。地面に着きそうになると再び上昇し、繰り返します。その時の音は、空気を引き裂きジェット機がすぐ近くを飛んだような、びつくりするすさまじいものです。これは翼を小さくまげて細かく羽ばたきをし、尾羽をいっぱい開くことで空気の抵抗によって出る音のようです。それ故「カミナリシギ」とも呼ばれています。この動作は、雌を引きつけたり、なわばりの宣言に使います。この空中シヨは朝夕に多く、曇った日は日中でも行います。



▲高原の湿地に住むオオジシギ

草原や牧草地などの湿地や池の周辺にいて繁殖します。冬はオーストラリア東南部に移ります。日本では中部地方の高原と青森、北海道に生息しています。日本のほかロシアに少しいるくらい希少種です。7cmもある長い嘴を泥に差し入れて、ミミズや昆虫を捕ります。体はハトより少し小さくスマートです。主に夜活動します。

湿地や草原の減少で絶滅が心配されています。この鳥が住める豊かな湿地や草原を残したいものです。

(野沢進之輔)

ふるさと再見 83

エゾムシクイ

この鳥はよく茂った針葉樹の暗い林や、谷間に近い急斜面を好みます。こうした林では数が少なくても動植物と複雑に関係をもち、この鳥のきちんとした位置があり、生きています。

食べ物は昆虫やクモですが、地上



▲亜高山帯に生息するエゾムシクイ

あまりなじみのない鳥ですが、毎年八ヶ岳など一五〇〇m以上の亜高山に、四月頃、東南アジアから渡って来て繁殖します。地球上では日本とウスリー地方(ロシア)だけに住む貴重な鳥です。

名にエゾ(蝦夷)と付いていますが、北海道だけでなく中部以北(二部四国)にも飛来します。後半のムシクイとは虫を食うという意味です。

を歩き回って探したり、木の枝や藪の小枝に止まって飛びついて捕えたりします。この鳥の大きさはメジロぐらいでとても小さく、雌雄同色です。「ピッ」とか「ピーツーチー」とかさえずります。さえずる期間は五〜七月で、ピークは六月です。

ムシクイと付く鳥は四種いますが、姿は良く似ていますが、声や生息している場所などで識別します。この鳥の保護のために、亜高山にある豊かな針葉樹林を残していきたいものです。

(野沢進之輔)

ふるさと再見 84

カラス



▲ハシブトガラス



▲ハシボソガラス

一年中見かけるカラスは二種類に分けられます。ハシブトガラスとハシボソガラスです。ハシブトは嘴の太りで、太いかつ、細かい糸で区別しています。嘴は、ハシブトは太くて上部がアーチ状で、ハシボソはやや細くてストレートです。

頭の額に相当する部分が、ハシブトは盛り上がり、ハシボソは平らです。鳴き声は、ハシブトは「カア、カア」と澄んでいて、ハシボソは「ガア、ガア」と濁っています。声による違いが一番分かり易いので聞いてみてください。

生息地は、ハシブトが林や森のある人の住む山間地に対して、ハシボソは平地の人家周辺、農耕地など開けた場所を好みます。二種ははつきり分かれて生活しているのではなく、群れやねぐらなど一緒のこともあります。

カラスはやや嫌われていますが、雑食で落ちているものを何でも食べてくれるありがたい掃除屋で、有機物を分解して土に戻す大切な役目をしてれています。知能も鳥類の中で一番進化していて、賢くてもしろい、見えて飽きない鳥です。

(野沢進之輔)

ふるさと再見 85

ハヤブサ

ハヤブサの飛ぶ速さは、水平で時速180km、急降下での時速は400kmと、鳥類の中では最も速い鳥の一つです。昔鷹狩に用いられた。

食べ物、ヒヨドリ・ハトなど中型の小鳥が多く、カモやネズミやウサギなども捕えます。飛んでいる鳥を捕る時、獲物より高く飛び、急降下して直接捕らえたり、足で蹴って落

下させたりします。速い鳥、強い鳥のイメージがあるためか、東北新幹線の電車や、小惑星探査機などに名が付けられ有名ですが、実際のハヤブサに出合う機会は少ないです。

ハヤブサの語源は、速翼からとか、速(速)と翼(翼)の語源とか、



▲頑丈な足を持つハヤブサ

「早伏」からとか諸説あります。ハヤブサは世界の広い範囲で繁殖し、日本でもほぼ全国に住んでいます。数が少なく絶滅危惧種になっています。

生息には広い空間が必要で、草原や農耕地など開けた広い場所にいます。果は海岸や山の断崖のくぼみを使いますが、最近では都市のビルや鉄塔にも営巣しています。

体の大きさはカラス位で、顔の両側にあるもみあげに似た黒い模様が特徴です。生態系の頂点にいるこの鳥の減少は、自然のバランスが崩れていることを知らせてくれています。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 86

アカゲラ

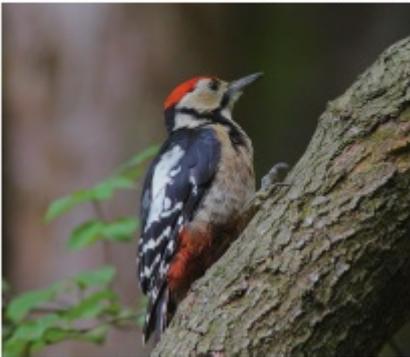
アカゲラはキツツ科の中では数が多く最も良く見かけます。

低山から山地の明るい林に一年中ほぼ同じ場所で生活しています。日本では本州以北に生息して

ます。

体全体の色は、ほとんど黒と白ですが、腹部や雄の後頭部の赤が目立つので、アカと呼ばれています。なお幼鳥は頭のとつべんが、雌雄とも赤色です。

ゲラはキツツキの古い名「けらつつき」からきています。けらは飛びながら、ケレケレと鳴くからです。普段は「キヨッ」と鳴きます。声の代わりにドラミングと言われる木をつついて「トロロロ…」と音を出します。これは雄の求愛やなわばり



▲アカゲラの幼鳥

の宣言に使います。乾いたよく響く木を造るようです。食べ物には主に枯れた木や枝の中にある甲虫の幼虫です。

のみのような嘴で突いて取り出します。このため足や舌や頭の筋肉などが特殊化しています。木のほかに地上でアリや昆虫、植物のヌルデ、ヤマブドウ、カキなどの実も食べます。

巣は自分で掘った木の中につくります。同じ木を使うことが多いです。この鳥にとつて森や林の中の枯れた木も生きていくうえで大切なものです。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 87

ガビチョウ

外国から来て飼育されていた鳥が逃げ出し、条件があえば繁殖して増えていくことがあります。そんな鳥のひとつが、ガビチョウです。

原産は中国南部や東南アジアですが、美しく鳴くので、江戸時代から飼われていました。

1980年代頃から、捨てられたり逃げ出したりして、現在、九州・関東・中部・福島県に分布しています。暖かい地域出身なので諏訪地方では生息不可と予測していましたが、今はあちこちで見かけます。

茅野では約十年前、湖東の三石学さんから、「秋なのに、クロツグミに似た声で鳴く鳥がいる。」と電話をいただいたのが、私の初めての



▲特定外来種のガビチョウ

確認でした。

ガビチョウとは中国名の面鳥をそのまま日本語にした名前です。目のまわりの白いアイラインが特徴です。他の鳥の鳴きまねもしますし、繁殖の終わった秋にもよく鳴きます。里近くのを含んだ林を好み、地上で虫やミミズや果実などを食べています。特定外来種になっていて飼育はできません。

今後もうこういう鳥が野外で増えると、日本にいる鳥と食べ物や場所が競合し、生態系に影響が出ないか心配です。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 88

ヤマガラ

ヤマガラは、全国各地に一年中生息しています。世界的な分布は限られていて、日本、朝鮮半島、台湾などです。住む場所は、平地から山地の林です。

長野県内では南部に多く、常緑広葉樹をより好むようです。

食べ物は、夏は昆虫が多く枝などを突いて探し出します。特徴的なのは、ドングリやエゴノキ、ハクウンボクなどの固い実を突いてたたき割って食べることです。くちばしをのみのように使っています。

実を突く時、写真のように、両方の足ではさむようにしています。

餌台のヒマワリの実も好きですが、その場で食べないで、枝や藪などに運んで、見えにくい



▲両足の間の木の实を突くヤマガラ

所で食べます。また木の実に土中や樹皮などに貯蔵します。これらの習性を利用して、昔はお宮などのおみくじ運びとして、人気を博していました。

巣は、樹内の穴など使い、巣箱もよく利用します。鳴き声は、繁殖期間中「ツツビー、ツツビー」とシジュウカラより、にこつて聞こえます。

冬は、他のカラ類と群れをつくって生活する時もあります。

このかわいい鳥に会うために、林の中を歩いてみませんか。(野沢 進之輔)

ふるさと再見 89

エナガ

エナガは平地から山地の林で、一年中比較的良く出会う鳥です。「ジュリリ」と特色ある小さな声があります。

林でもカラマツなどの植栽林に多くいますが、最も好むのは落葉樹林です。

世界的には、ユーラシア大陸の中緯度に広く分布しています。体は、ごく小さく、長い尾が目立ちます。名前も、この尾をひしゃくの柄に見立てて「柄が長い」からきています。雌雄同色です。

食べ物は、小さい虫やその幼虫、虫の卵、クモ、それに柔らかい果実、樹液などです。その中でも主食はアブラムシで、小枝や葉っぱから見つけ出して食べます。あの小さな虫を食べ生きているとは驚きです。

繁殖は他の小鳥より



▲群れで水を浴びるエナガ

早く3月には営巣します。枝の又や藪の空間に、コケを集めてそれを虫の糸を使ってくちばしでつづつて袋状の巣をつくります。巣の上の方にだけ出入りする穴があります。

巣はヘビやカラスなどにおそわれることが多く、無事ひなが巣立つ方が少ないように思います。

行動でももしろいのは、繁殖期以外三〜二十羽位の群れで生活し、群れのなわばりをつくりまわります。繁殖も群れのなわばりの中に分散して行います。(野沢 進之輔)

ふるさと再見 90

アカモズ

アカモズは渡りをするモズで、夏を中心にやって来て、中部以北で繁殖します。今から四十年前、アカモズは茅野市の山際の開けた場所によく見られたのに、今はほとんどいません。

減った原因の一つに、冬過ごすベトナムで、戦争の枯葉作戦の影響があったのではないとも言われています。種が減っていくことは自然の多様性を失っていきます。

九年前に渡って「ふるさと百話・ふるさと再見」で、百二十種を掲載しました。これ以外に当市には、まだまだ沢山の野鳥がいます。こんなにも多くの種類がいることに驚かれた方もいると思います。このことは、変化に富んだ豊かな自然があるからです。鳥を支えている植物や虫などが豊



▲今はあまり見かけないアカモズ

富でなくては生きていけません。鳥も人も、それらと複雑に関係を保ちながら生きています。

素敵で愛らしい鳥たちといつしよに生きていることを分かっていただけたらありがたく思います。これから豊かな自然に目を向け守り育てていきたいものです。連載中、励ましていただきたり話題にしてください。たおかげで続けてこれたことに感謝いたします。

長い間見ていただき、本当にありがとうございます。(野沢 進之輔)